
*** Love cake for you ***

奥山メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love cake for you

【Nコード】

N1281J

【作者名】

奥山メイ

【あらすじ】

『運命』の与える試練を乗り越えてまで、誰かを愛したことは、ありますか…？ 舞台は、パティスリー。童心を忘れないいちごは、軋む齒車に翻弄されていく。決して負けない、強い絆の物語を
: For you .

序章

「2006年」東京の夢

集中治療室の扉が、ギイイ…と開いた。

『日下部さん。…入って下さい』

医者が無表情な声。

長椅子に掛けていた全員が、張り詰めた空気の中、のろのろと立ち上がった。

『先生。あの…菜那は…』

菜那の母さんが、擦れた声で医者に尋ねる。その肩を、菜那の父さんが守るように支えている。

『…』

眼鏡を冷たく光らせた白衣の医者は、静かに息を吐きながら、首を横に振った。

廊下の空気が、モノクロに変わった。

『そんな…ああ…』

菜那の母さんが泣き崩れる声。無言で立ち尽くす、菜那の父さんの背中。ただ震えることしか出来ない菜那の弟・一弥の、動かない視線…

切れかかった蛍光灯が、ちらちらと点滅していた。

『…どうぞ』

医者が、集中治療室の開け放たれた扉を示す。菜那の家族は、重い足取りで医者に続いた。

俺は、どうすべきか一瞬迷った。家族の“別れの場”に、俺は居ていい人間じゃなかった。

けれど、俺は心を決めて、菜那の家族の後ろについていった。菜那が本当に逝ってしまったのか、自分の眼で確かめなければ信じられなかった。

影法師のように、集中治療室にそっと滑り込む。しわしわの顔をした老看護師が、俺の背後で扉を閉めて出ていった。

バタ…ン。

その重々しい音は、俺の鼓膜を突き抜けて、脳天まで響き渡った。

そして、俺は菜那の変わり果てた姿を見た。

白いベッドに横たわる、彼女。胸元まで布をかけられ、そこから細い腕がダランとむき出しになっている。救急車に乗っている間に

付けられた人工呼吸器も管も、既に外されていた。

見慣れた白い肌は、蟻のように透き通っている。目蓋は優しく下るされ、色を失った唇は軽く開いていた。長く少し乱れた髪ばかりが、黒々と目立った。

まるで蟻人形。

けれどそれはやはり、先程まで隣で笑っていた、菜那だった。

『な…菜那…』

娘の姿を見るなり、母さんが力なく床に崩れる。父さんは唇をきゅつと結んだまま。中学生の一弥だけが、両親の前に出て、姉の亡骸に触れた。

『ねーちゃん？』

彼は、いつものように問い掛ける。

『おい。起きろよ。いつまで寝てんだよ…』

勿論、菜那が答える事はない。わかっている筈なのに、一弥は姉を強く揺さ振った。

『ねーちゃんっ。起きろよっ！』

『一弥あー！』

母さんが叫んで、息子の肩にしがみつく。

『やめて…菜那に、これ以上イタイ思い、させないであげて…。眠らせてあげて…』

『何言っただよ母さん！ねーちゃんは起きてくるって…！』

一弥が怒鳴った。

『いつもみたいに寝坊してるんだよっ。ちゃんと起こしてやるっよ！！』

父さんが静かに妻子に歩み寄る。そして、無言で二人を抱き締めた。

『…菜那は…』

呟いた父さんの声は、ワナワナと震えていた。

『もう、目を覚まさないんだよ…』

『嘘だ。そんなのウソだっ！！』

一弥が身を振る。

『父さんも母さんも嘘つきだ！！ねーちゃんは、まだ生きてるっ！！』

叫ぶなり、彼は父親を突き飛ばし、ダツと集中治療室を飛び出していった。

遠ざかっていく、一弥の足音。

あとには、菜那の両親と、棒立ちしている俺だけが残された。

『悟君…』

耳が痛くなるような静寂の中で、菜那の父さんが、ゆっくりと俺を振り返った。

その顔は、娘と同じ…蠟人形のようにだった。

蠟の唇が、本当にわずかに開いた。

『…お前が、菜那を殺したんだぞ…』

『

序章

「2006年」東京朝

「うわあああっ！！」

叫んで、俺はガバツと身を起こし 目を覚ました。

また、いつもの悪夢を見てしまったのだった。気持ちが悪く落ちて着いてから気が付くと、ぐっしょりと寝汗をかいている。

左手にある破れた障子の向こう側から、薄い金色をした光の筋が差し込んでいた。新しい1日が、既に始まっているのだ。

1月の寒さは、かなり身に堪える。ぬくぬくとした布団から出るだけでも、相当な精神力を要す。思い切って右足を畳の上に投げ出すと、とたんに冷気がジワツと伝わってきて、後悔した。

6年前の夜のシーンを夢に見るのは、特に珍しいことではない。あれから月日が流れたけれど、あの夜の記憶は決して色褪せないのだ。菜那の肌の“白”は、今も生々しく目に浮かぶ。

時計を見ると、午前6時過ぎだった。今日の講義は2限からだから、もう少し寝ることも出来る。けれど、今朝はなぜか、もう眠る

気はしなかった。悪夢のお陰で、意識はハッキリしていた。

…どうしようか。

早く大学に行っても、特に用事がある訳ではなかった。サークルには入っていないから、暇つぶしするアテもない。

ただ、この小さな1DKの部屋に、閉じこもっていたくはなかった。菜那の面影から、離れてしまいたかった。

…そうだ。バイト先にも顔を出してこよう。開店前の準備を手伝うくらいならできる。

俺は布団の中でモゾモゾと着替えを済ませた。服は、畳の上にバラバラに散らばっている。適当に、目についた紫のTシャツにジーンズ、そして革ジャンを選んだ。マフラーをしようかと思ったけれど、革ジャンに合わなかったからやめた。

布団を抜け出す勇気が出たのは、それからだった。

*

一時間後。

俺は、ある私鉄の駅前でバイクを止めた。この近辺に駐車場は無いから、いつも路上にバイクを放置する。

たまに警官がうるついでにいるけれど、不思議なことに、駐車違反を問われたことはなかった。きっと、警官もどこかで路上駐車するに違いない、と俺は勝手に解釈していた。

一応、歩行者の邪魔にならないような歩道の端を選んで、そこに

バイクを置く。因みに、主婦たちの自転車は我が物顔で歩道の半分を占拠しているのだが…。

風に乱れた服装を整えると、俺は駅前にデーンと構えている洋菓子店に目をやった。

それは、まるで小さな美術館のような店舗だった。

白くツルツル光る外壁。回転式のドア。二階部分まである巨大な窓ガラス越しに、吹き抜けの解放感溢れるフロアが見える。

店内は白を基調に作られ、インテリアはモノトーンで統一されている。まだ開店前だが、あと二時間もしたら、そこはケーキを楽しむ女性客で一杯になるだろう。

俺はバイクを置き去りにして、その洋菓子店の裏に回った。大抵の店とは違って、この洋菓子店は裏側まで手入れが行き届いている。ゴミ袋一つない。代わりに、小さな花壇に、溢れんばかりのパンジーが揺れていた。

裏口は、重厚な樫の木の作りだ。ゆっくりドアを引くと、頭上でチリンチリンとベルが鳴った。確か、店長の娘さんが、夏にスイスで買ってきたものだ。本来は、牧羊犬の首につけて使らしい。

「あれ？悟くん？」

予想どおり、まだ薄暗い店の奥から、驚きの声が上がった。

「今日は随分早いな。何かあった？」

声の主は、コック帽を被った人懐こそうなオヤジだ。歩くたび、デップリとした腹がゆさゆさと左右に揺れる。ニッコリ笑うと、目が細い一本の線になるのが特徴的だ。イソイソと手を拭きながら、俺を迎えに出てきた。彼こそが、この洋菓子店の店長なのだ。

「なんとなく…気が向いたんで」

俺は、もじもじしながら答えた。

「手伝っちゃおっかなー…なあって」

「いやあー、有り難いつ」 店長はニコニコして俺を店内に導いた。「ちょうど人手を借りたかったんだ。ウチの若いヤツは、みんなフルーツの仕込みで手一杯でね」

俺は、そのまま店長に付いていった。

俺のバイトは、カフェでお茶をするお客さん達にケーキを運ぶこと。つまり、ウェイターだ。洋菓子について、少し知識はあるものの、『作る』なんてことは全くできない。事は、接客が殆どだった。

だから、店長が俺を厨房に連れて入ったときは、本当に驚いた。

「てっ、店長」

俺はあわてて声をかけた。パイ用の林檎の皮を剥いていた数人が、俺に気づいて怪訝そうな顔をした。

「どうした？」

店長が振り返った。

俺は口をパクパクさせながら、なんとか言葉を絞りだした。

「俺っ、厨房に入ったって…何にも出来ないッスよ？包丁の持ち方だっつて、なっつてないし…」

すると、店長はワハハハ、と声をあげて笑った。

「悟くんがケーキ作り、か。いつかやらせてみたいモンだなあ。面白そうだ」

「は…はあ…」

「違う、違う。君にやってほしいのはね、残念ながらケーキには関係ないんだよ。ほら、あの子」

店長は、厨房の隅を示した。俺は、そこにチョココンと立っている人を見た。

150センチ程の背丈。華奢な体つきの、女の子だった。

柔らかそうな白い頬。猫っ毛の、チョコレート色の髪は、少しうねりながら肩にかかっている。大きな目はくりくりっとしていて、ジッと天井を見つめていた。

身体を包むのは、パッチワークの可愛らしいワンピース。少し寒いのか、純白のファーがついたコートを羽織っている。まるで、童話の絵本から飛び出してきたみたいなお雰囲気を持っていた。

「いちごちゃん！」

店長が呼び掛けた。すると女の子は、ふつつと天井から目を離し、俺たちを見た。

その時に見せた、溢れだすような笑顔。悪戯っぽい小さな八重歯。俺は、知らず知らずのうちに、ドキツとしていた。

「彼女は、明日からこの店の職人の仲間入りなんだ」

店長がニコニコしながら、俺に説明した。

「東京に来たばかりだね。店内だけじゃなく、都内も案内してあげたほうが良いと思うんだよ。何しろ、家もまだ決めてないみたいだし」

俺は、ビツクリして女の子をもう一度上から下まで眺めまわした。家も決めずに上京し、仕事を始めようとしていたなんて…随分と危なっかしい。

「僕は店を空ける訳にはいかないから…悪いけど、悟くんが色々教えてあげてくれないかな」

店長が、申し訳なさそうに俺を見た。

「わかりました」

俺は答えた。

「俺でよければ…」

すると、女の子の笑顔は、さらに輝きを増し、キラキラするまでになった。

「ありがとうございます!」

女の子の発した声は、小さな鈴みたいだった。ゾクツとするくらい、傳くて、可愛らしかった。

「わたし、春野いちごといいます。よろしくお願いします」

「あ…よろしく」

俺は、ぎこちなく答えた。心臓がバクバクと音を立てている。

「俺は、青山悟。大学生で…バイトしてます」

「大学生なんですか？」

いちごが反応した。

「わあっ、カッコいいっ」

「いや…別に、そんな…」

俺は、言葉を探して迷子になっていた。気のきいたことを言おうとして、必死だった。

けれど、いちごのまだあどけない表情を見ると、思考が停止してしまう。

「これから、よろしくお願いします…」

再びいちごが言って、ぺこつと頭を下げた。

寒い冬なのに、一つの暖かい光が灯った気がした。

…そんな、朝の出来事だった。

序章

「2006年」横浜

横浜市内、某所。

品のいいコーヒーとケーキを振る舞うことで有名な、ある洒落たパティスリー。

その、日のあたる気持ちの良いテラスで、騒動は起こった。

「What is this? I can't eat such a tasteless cake! (これは何だ?こんな不味いケーキ、食べられるか!)」

いきなり見ず知らずの白人男性に怒鳴りつけられ、給仕をしていた女性は、その場に立ちすくむ。

男性は、食べかけのチーズケーキの皿を女性店員に突き付けていた。

…今のは、英語?

困惑しながら、女性店員は考える。一応、中学・高校で英語の勉強はしてきた。けれど、実際の英会話となると、全く歯が立たない。今、目の前に座って腹を立てている男性が何を言ったのかなど、わかる筈もない。

「ぱ…パードウン?(すみません、もう一度言ってください)」

昔習った英語表現を、頭の片隅から引っ張りだす。

すると、白人男性は嘲るような調子で叫んだ。

「Humph, CAN'T you so much as understand what I said? You haven't gone abroad to study cake, have you? (ハンつ。俺が言ったこともわかんねえのか？洋菓子を勉強する為に外国へ行ったこともねえんだろ?)」

「あ…あの…」

女性店員は、ただオロオロするばかりだ。

パラソルの下に会話を楽しんでいた周りの客も、何事かと身を乗り出してこちらを見ている。

「I DON'T eat this!! (こんなもの食わねえぞ!)」

白人男性は怒鳴ると、チーズケーキの皿をウッドデッキに叩きつけた。

バーン!

大きな音と共に皿が割れ、チーズケーキが力なく転がる。

「!」

周りの客たちが、驚いて息を呑んだ。悲鳴を上げる者もいた。そんな中で、女性店員は為す術もなく、途方に暮れるばかり。

店長らしき女性が駆け付けてきた時には、白人男性はチーズケーキを踏み付けていた。

「お客様!」

店長が慌てて男性を止めに入った。

「申し訳ございません。うちの店員が、失礼を致しました」

店長は、女性店員と共に、ペコペコと頭を下げる。本当は、この無礼な白人男性に対して怒り心頭なのだが、まずはこの場を収めなければならぬ。

すると、白人男性は鼻息も荒く、片言の日本語で怒鳴った。

「コンナ味のケイクで、よく店を出しているナ！」

「申し訳ありません…」

店長も店員も、深く深く、頭を下げ続けた。

…その時。

「失礼っ」

声と共に、一人の青年が席を立った。

とても背が高い。185センチはあるうかという、細身の人物だ。針のような鋭さを漂わせているが、女の子のように色白で、それは美しい顔立ちをしている。上品なスーツに身を包み、静かに、足音すら立てずに歩く。とりわけ、優雅に束ねられている黒い長髪が目を引いた。

美男子の登場に、周りの女性客から、黄色い声が上がりはじめた。

しかし、当の本人はそれを見て見ぬフリをしていた。白人男性に歩み寄ると、彼は流暢な英語で語りかけた。

「Cakes made in this shop is very nice. Your taste is unusual.

(この店のケーキは、とても美味しいですよ。あなたの味覚がおか

しいのです。）」

突然のことに、白人男性は怪訝そうな表情になった。青年の身なりをジロジロと見回す。

「Who are you, boy? (どこの誰だい、坊っちゃん?)」

青年は、ニツコリして答えた。

「Me? I'm Ayato Kuraki. You have heard about me, have you? (僕?僕は、倉木綾人です。僕について聞いたこと、あるでしょ?)」

その名を耳にした途端、白人男性は青ざめた。

「Ayato... Kuraki!?!」

喚くように叫ぶと、慌ててチーズケーキの代金をカフェテーブルの上に放り投げ、逃げるように店を飛び出していった。

客たちは揃って、その後ろ姿を見送った。

「あ、あの...」

パティスリーの店長が、震える声で青年に顔を向けた。

「本当に、あの倉木綾人さんなのですか...? フランスの洋菓子コンクールで優勝した...」

「ええ、そうです」

青年は、微笑みを見せた。

「ちよつとした用があつて、一時的に帰国しました。明日には、またNYに戻ります。美味しかったですよ、ケーキ。ごちそうさま

でした」

そして、お札をテーブルの上に置くと、青年はすたすたと出ていってしまった。

残された誰もが、ポカンとしていた…。

倉木綾人。

その名は、アメリカやヨーロッパだけでなく、日本にまで知れ渡っていた。

フランスの洋菓子コンクールに若干20歳で優勝した彼は、世界を又にかけて活躍するパティシエだ。その才能と若さに、多くの巨匠達が魅せられている。彼の父もパティシエで、今は親子でニューヨーク、パリ、ウィーン、ミラノ、ロンドンに店を出していた。

洋菓子界で、その名を知らないものはない。根拠地のアメリカでは、洋菓子界と関係の無い人々ですら、彼を知っているのだ。

「すごい人だわ…」

店長が呟くと、女性店員も大きく頷いた。

綾人は、パティスリーから真つすぐ横浜駅に向かっていった。途中、思い出したように携帯電話を取り出す。長い指先で軽やかにタッチ

し、海外電話をかけた。

「もしもし、父さん？」

綾人の表情は、氷のように冷たいものへと変わっていた。

「ああ、行ったよ、横浜のパティスリー。美味かったけど、僕たちのケーキには全く及ばないね。大阪や名古屋と同じで、ウチが買収するレベルの店じゃなかった。自分たちの味に、誇りが無い」

その表情には、先ほどまでの美しさはない。

「残る偵察先は、東京だよ……」

序章

「2006年」ロス

ぞあん…ぞぞあん…

波は、打ち寄せては引き、打ち寄せては引く。

黄昏時の空の下。長い小麦色の髪をした少女は、一人棧橋に立っていた。

まだ、10歳位だろうか。

何をすることもなく。

ただ、青く澄んだ瞳で、黄金色の空を見ていた。

白いレースをあしらった長いワンピースが、ふわりと風に揺れた。

「ローズ」

どこからか、遠くで呼び声がした。

「何処にいるの。早く戻って来なさい」

「…ママ」

少女は、唇だけで呟いた。瞳も顔も、夕日に輝く雲に向けられた

はまだ。

「じめんなさい……」

泣きそうな声。

フランス人形のような、可愛らしい表情が歪んだ。

「わたしは、もう、戻らない……」

裸足で、一步踏み出す。そこは、栈橋の一番端の部分だった。

すぐ眼下で、波が穏やかに流れていく。この波は、何千マイルも遠くへ繋がっている。ここロサンゼルスから、太平洋を渡って、遙か向こうの『ジャパン』まで。

「わたしを、運んで」

少女は、波に語りかけた。小さな声で。

「わたしを、あの人の処まで、連れてって……」

波は、優しく流れすぎていくばかり。何も答えない。

けれど、少女は満足げに微笑んだ。まるで、波から返事を貰ったとでもいうように。

そして、

深く息を吐くと、

迷わず海へと身を投げた

。

夕日を反射して輝く波間は、小さな少女の姿を、あっという間に飲み込んだ。

音すら、しなかった。

青い水に全身を包まれ、少女は微かに口元を上げた。

金髪がゆらゆらとたなびき、ワンピースが羽根のように広がる。

安らかな少女の表情は、泡となって消えていく人魚姫を思わせた。

彼女は、沈んでいく。

ゆらゆら、

ゆらゆら、

暗い暗い、海の底へと。

第1章

「1989年」1

夜。

小さな田舎町の、

小さなケーキ屋さんに、

小さな灯りがともっていた。

「ママー。えほんよんでーっ」

可愛らしい声と共に、一人の小さな女の子が店の奥から現れた。ぺたぺたと素足で、ショーウィンドウの裏側まで走ってくる。

「あらあら、いちご。ダメでしょ、裸足でお店まで来ちゃ」
ショーウィンドウの前で店じまいの準備をしていためぐみは、白いエプロンを外しながら困ったように笑う。彼女は、ウィンドウ内を拭いているところだった。

「じゅめんなさあい」

女の子は唇を尖らせ、小さく俯いた。柔らかな髪の毛は左右で高く結ばれ、彼女の動きに合わせてユラリと揺れる。

「あら。おばあちゃまに結ってもらったの？」
母親は優しくほほ笑み、娘の髪を撫でた。

「うんっ」

とたんに、いちごはニッコリと表情を変え、ピョンピョンと飛び跳ねはじめた。

「ママ、いちご可愛い？」

「ええ、可愛いわ」

めぐみは愛しそうに目を細めていちごを見つめた。

「いちごは、世界で一番かわいい」

「エへへー」

照れたのだろう、いちごは飛び跳ねるのをやめ、キヤツキヤツと笑い声を上げた。

「ママっ。えほん、読んでっ」

「もう少し待って。ママ、まだお仕事してるのよ」

めぐみは娘の頭をもう一度撫でた。

「いちごはお利口さんだから、待ってられるよね？」

「うんっ。いちご、お利口だから待ってる！」

いちごは満面の笑みで返事した。そして、パタパタと店の奥へと走り去っていく。そこに、母娘が祖父母と同居する家があるのだ。

めぐみは、去っていく娘の後ろ姿をほほ笑みながら見送った。

いちごには、父親がいない。母親が祖父母とケーキ屋を切り盛りしている間、いちごは寂しい思いをしながら、その帰りを待っているのだろう。

「早く終わらせなきゃね……」

彼女は呟き、ウィンドウを拭く手に力をこめた。

「…むかしむかし、あるところに、小さなケーキ屋さんがありましたとさ」

ベッドの中で我が娘を寝かしつけながら、めぐみが絵本を読んでいる。

「ウサギさんも、クマさんも、きつねさんも、ブタさんも、みんなケーキがだーい好き。」

「だーい好き!!」

ニコニコと布団の中でいちごが繰り返す。

そんな娘の反応にほほ笑み、めぐみは続けた。

「甘いケーキは、みんなを幸せにしてくれます。だから、町はいつも笑顔でいっぱいでした。ところが、ある日のことです。ケーキ屋さんは突然、ケーキを作るのが嫌になってしまいました」

「えーっ」

いちごが不安げにまばたきました。

「ケーキ屋さん、ケーキきらいになったの？」

「そう。嫌いになっちゃったのよ」

めぐみが答える。

「…ケーキが食べられなくなってしまったので、町のみんなは大騒ぎです。みんな、悲しくて元気が出ません」

「うわあ、大変だああ」

娘は、布団の中でゴソゴソ動いた。

「それで?どうなったの?」

「ウサギさんは、しょげてしまって元気に跳ねることが出来ません。クマさんは、やる気が出なくて寝てばかり。きつねさんは、がつかりして狩りが出来ません。ブタさんは、怒ってブーブー言っています」

めぐみは、絵本のページをめくった。

「町は、静まり返ってしまいました」

「…」

今にも泣き出しそうな顔をして、いちごが絵本を見つめている。

「ケーキ屋さんは、気付きました」

めぐみは、娘の背中をポンポンと叩いてやりながら優しく読んだ。

「ケーキは、みんなを幸せにしているのです。ケーキ屋さんがケーキを作らなかつたら、みんながしょんぼりしてしまうのです」

ページをめくると、そこには色とりどりのケーキの絵が描かれていた。

「ケーキ屋さんは、もう一度ケーキを作りはじめました。すると、どうでしょう。みんなが笑顔になったのです。ケーキ屋さんの甘いケーキは、町のみんなを幸せにし続けましたとき。おしまい。」

「ケーキ屋さん、すごいねえ!」

いちごがはしゃいだ。

「いちごも、おっきくなったらケーキつくる!」

「ええ、そうね」

めぐみは目を細めた。

「みんなを幸せにするケーキ屋さんになりなさい、いちご…」

そつと閉じられた絵本の表紙には、こうあった。

「作・絵 春野めぐみ」

それは、めぐみが愛娘のために書いた本。いちごのことを思っ
て書き上げた本。

その事実をいちごが知るのは、もう少し後のことだ。

黄金色の光と共に、その日の朝もやってきた。

「起きなさい、いちご」

フルーツの仕込みを終え、めぐみはベッドルームの扉をノックする。

「朝ごはんよ」

「…」

部屋から返事はない。

めぐみはもう一度、少しだけ声を大きくして娘を呼んだ。

「いちご。まだ寝てるの？」

しかし、それでも返事はない。

「全くもう…」

呟くと、めぐみはドアをゆっくりと押し開けた。

部屋は、開け放された窓から差し込む太陽で、金色に輝いていた。カーテンは風にそよぎ、穏やかな空気が満ちている。

布団はぐちゃぐちゃになってベッドから落ち、枕は足下に飛ばされている。そんな中で、いちごは猫のように丸まったまま眠っていた。光に包まれたその姿は、まるで天使だ。

めぐみは、夜明け前からの仕込みの疲れがどこかへ吹き飛んでいくのを感じた。口元を少し上げ、ベッドへと歩み寄る。

「いちご…」

母親は、そっとかがみこみ、娘の頬に触れた。マシユマロのように柔らかい娘の肌は、めぐみの手心地よい。

「きつと、素敵な夢を見ているのね…」

風が、優しくめぐみの髪を揺らした。娘と同じ、柔らかいロングヘア。

「私も、夢を見ていたわ…いちごのパパと出会った時は」

めぐみは囁いた。

「でも、夢はすぐに覚めちゃった…」

いちごは母親の言葉を聞いているはずもなく、安らかな寝息を立てている。

めぐみの瞳は、娘を見ているようで、実は遠い昔を思い返していた。

めぐみが、いちごの父と知り合ったのは5年前。ちょうど、クリスマスの日だった。

恋に落ちた二人は、すぐに結ばれた。

めぐみにとって、それはロマンチックな日々だった。愛しい人のために生き、愛しい人のために尽くせる日々。

それは、めぐみにとって一番幸せな時だったかも知れない。

しかし、夢は「覚めて」しまった。

めぐみが胎内に命が宿ったことを知ったのは、その直後のことだった。

「今のうちに、夢を見ておきなさい」

娘に呼び掛けるめぐみの声が、少し震えた。

「いちご…」

人間の、残酷な本性を知ってしまうまでは。

あなたには、無邪気なまままでいて欲しいの …

何も知らずに、いちごは眠り続けている。

日が高く昇る頃、いちごは一人野原を駆けていた。

水色のワンピースを着て、お弁当が入った黄色いカバンをたすき掛けにして。

このタンポポやつくしが咲き乱れる野は、ケーキ店の裏にあった。めぐみや祖父母が店で働いている間、いちごはこうして野原で駆け回って過ごしているのだ。

他に人気の無い、寂しい場所。しかし、いちごは寂しさなど全く感じてはいなかった。

草花が遊んでくれるから。

風が唄ってくれるから。

太陽が踊ってくれるから。

いちごは、素足で駆け続ける。息を切らすことも、飽きてしまいうちごともなく。

この野原は、いちごの為の場所といっても過言ではなかった。
ここでは、いちごは王女のように舞い遊べるのだ。

いちごは、キャツキャツと笑い声を上げながら野の外れまでやってきた。そこは、町を見下ろせる小高い丘だ。田舎町の風景は、まるでオモチャのようにいちごの眼に映った。

風が吹き過ぎていく。

蝶が、優雅に彼女の前を飛んでいく。モンシロチョウだ。

いちごは悪戯っぽくニッコリすると、その蝶を追いかけて始めた。

蝶が舞うのと同時に、いちごも野を舞っているように見えた。

その時。

ガササッ！！

ふいに、近くの茂みから音がした。

ガサッ、ガサッ。

「…?」

いちごは立ち止まった。蝶が、ひらひらと彼方へと去っていく。しかし、いちごは獣のように耳をそばだて、敏感に辺りを見回した。

「こは、いちごの野。普段は、やってくる者はいない。」

「…ママ?」

不安げに、いちごは呼んだ。

「おじーちゃん?おばーちゃん?」

ガサッ。

すぐ近くの、ツツジの茂みが大きく揺れた。

びくん!

いちごは震え、思わず後退りする。

今までは、この野に彼女を怯えさせる存在はいなかった。未知の恐怖に、いちごはつばらな瞳をグッと見開く。

ガサアッ!!

茂みが激しくざわつき、突然、バツと黒い影が飛び出してきた。

「いやあ!!!」

いちごの悲鳴が、野に響いた。

「いやあ！」

いちごが上げた悲鳴は、野原中に響き渡った。

彼女は、恐怖に身をすくませ、ただその場に立っていた。逃げたくとも、身体が動こうとしないのだ。

いちごは、目を見開いたまま、茂みから飛び出してきた影を見つめた。

その影は、弱っているようだった。髪の毛には葉っぱがくつき、手足はあちこちが擦り切れている。うつぶせに力なく草の上に倒れており、その微かな息の音が、いちごの耳に届いた。

いちごは、恐る恐る影に一步近づいた。

「だれ…？」

もう一步。

いちごは、影に歩み寄る。そして、影の正体が同一年位の男の

子であることを、はっきりと確かめた。

「…だあれ？」

いちごは怖いのを忘れ、男の子の頭の横にしゃがみこんだ。

「私はいちごよ。あなたは、だあれ？」

すると、いちごの声に反応して、男の子が僅かに頭を上げた。

「…う…」

細々と擦れた呻きが、彼の喉から洩れる。

「どうしたの？お怪我したの？いたい？」

いちごは心配になって、男の子をぐっと覗き込んだ。

「…」

言葉は発しないが、男の子が小さく頷いた。涙に濡れた瞳が、はっきりといちごの視線と重なった。

「任せて！」

いちごは、かわいらしく微笑みかけた。

「すぐ元気にしてあげるから！」

彼女は、ゴソゴソと黄色いカバンの中を探り始めた。中から、次々といちごの「宝物」が姿を現わす。タンポポを編んで作った冠、クローバーの花束、赤みがかった石…。

そして、彼女はお目当てのものを引っ張りだした。

「ハイ。これ、食べて」

いちごが男の子に差し出したのは、少しひしゃげた茶色いカツプケーキだった。クリームもついていなければ、フルーツも入っていない。朝、めぐみが「おやつ」としていちごに持たせたものだった。

「食べて」

いちごは、もう一度言った。

「食べたなら、ウサギさんやブタさんみたいに元気になれるよ」

男の子は不思議そうにいちごを見上げた。“ウサギさんやブタさんみたいに”というフレーズが気になったのだろう。が、やがて彼は小さく首を横に振った。

「ケーキは、いらない……」

「えーっ、どうしてえ」

いちごは、目をぱちくりさせた。

「ママが作ったケーキ、おいしいんだよ？」

「…いらない…」

男の子は、熱に浮かされたように繰り返した。

「ケーキ、嫌い…」

「だめえっ」

いちごは、頑固にケーキを男の子に突き付ける。

「ママが作ったケーキ、嫌いなんて言っちゃだめえ！おいしいんだよ、食べてよ」

いちごはその時、男の子の汚れた頬を、涙が一筋伝うのを見た。涙は、キラツと日の光に反射しながら、次から次へと溢れてくる。

「どっ、…どうしたの？…どこかいたいの？」

いちごは慌てて、男の子の背中を抱き締めた。自分の具合が悪
いとき、めぐみがこうして抱き締めてくれるのを思い出したのだ。

「い…や…だ」

男の子は、いちごの細い腕の中で、顔をぐちゃぐちゃにして泣いていた。

「ケーキなんか嫌い…またパパに怒られる…」

「誰も怒らないよ！」

いちごは、必死に男の子に呼び掛けた。

「ケーキ食べたら、みんな元気になるんだよ。だって、きつねさんもクマさんも元気になったもん。いちごだって、ほら…」

彼女は、カップケーキを一口頬張ってみせた。

控えめな甘さが、いちごの口の中にふわっと広がる。

いちごが、大好きな味。

めぐみの作ってくれる、優しい味。

いちごは、無邪気にニコツと笑った。

「…おいしいよっ」

男の子は、潤んだ瞳でポカンといちごを見つめている。「信じられないものを見てしまった」という表情だ。

「どつしたの？」

男の子にジッと見つめられていることに気付いたいちごは、大きく瞬きした。

「…ケーキは、もっとお行儀よく食べなきゃいけないんだよ？」

男の子は啞然としていた。

「ぼく、いつもパパに怒られるんだよ。ちゃんとお行儀よくケーキと向き合いなさい、って。パパ、怒るとほんとに怖いから…ぼく、逃げてきたんだ」

「ふーん…」

いちごは再び瞬きした。

「パパに怒られるから、ケーキが嫌いなの？」

「…」

男の子は、しょんぼりとうつぶむく。それと同時に、グーツと空腹を告げる音がした。

「ここには、怒るひとなんかないよ。大丈夫だよ」

いちごは、ニッコリした。まるで春を詰め込んだような、優しい笑顔だった。

「ね、だから食べて。おなかすいたでしょ？」

男の子は、ついに折れたようだ。草の汁で汚れてしまった手で、ゴシゴシと目をこすりながら、小さく頷く。

幼い手から幼い手へと、カップケーキが渡された。

男の子は、よほどお腹が空いていたのだろう。夢中になって、ケーキにかぶりついた。

その様子を、いちごはドキドキしながら見守っている。

元気になってくれるかな。ケーキのこと、大好きになってくれるかな。

男の子は、ガツガツと食べ続けた。あっという間にケーキが入っていたカップは空っぽになる。

「どっぴっ？」

いちごが心配そうに尋ねた。

「元気になった？」

すると、男の子は恥ずかしそうに、しかし満面の笑みを見せた。初めて見せた、笑顔だった。

「…おいしいー!!」

「おいしい!」

その言葉は、どんなにいちごを嬉しくさせただろう。

あの絵本のように、ケーキは男の子を笑顔にしてくれたのだから。

男の子は、先ほどまでとは別人のようになっていた。いちごの真似をしてクローバーを摘みながら、話したのだ。

「ぼくのパパもね、ケーキつくるの。フランスとアメリカにお店を持ってるんだ」

「ふらんす? あめりか?」

いちごは目をキョロキョロさせる。

「ずつつと遠いところにある国なんだ」

男の子が言った。

「ぼくも、アメリカに住んでるの。パパが日本にもケーキ屋さんを開くから、今はこっちに来てるんだ」

「でも、パパは怖い人なんですよ?」

いちごはクローバーを器用に編みこんでいく。

「ううん。いつもは優しいよ。ケーキを作るときだけ怖くなるの」

男の子は、少しだけ目を伏せた。

「パパは、ぼくに“いちりゅうのケーキしょくにん”になってほしいんだって」

「いちりゅう、って?」

いちごが聞く。

すると、男の子も首を傾げた。

「…わかんないや」

二人はケーキの話をやめ、子供らしくキヤツキヤツと笑い声を上げて遊び始めた。

二人の頭には、お揃いの冠が載っている。白いクローバーの花で編まれた、世界一可愛い冠。

全ての生命が芽吹く春の野で、二人はいつまでも笑っていた。

*

その頃、町では大変な騒ぎが起こっていた。

昨日からホテルに滞在していたある家族が、「息子が昨夜から行方不明になっている」と言いだしたのだ。その一家の主は、海外で大成功を収めたことで著名なパティシエ 倉木雄三だった。

小さな町は、この事件に揺れていた。有名人の子供の失踪など、今までにない大事件だったのだ。

「誰かが誘拐したのではないか」という噂すら流れた。

そんな中。

倉木は、不安に駆られてながら、妻と共に警察署にいた。ピリピリと、重く張り詰めた緊張が流れている。彼らは、息子に関する何らかの知らせを待ち続けていた。

倉木は、細身かつ長身の男で、顎に僅かな髭を生やしていた。針のように鋭く冷たい眼の持ち主で、その視線を受けた町の警察官達は、凍てつくような寒さを感じた。

「どこに行った…綾人」

彼は、神経質そうに息子の名を呟いた。

「まさか…」

いちごが男の子の手をひいてケーキ店に帰宅の途についたのは、空が茜色に染まり始める頃だった。

野原を出て、水田の間の舗装されていない一本道をてくてくと歩く。野原から町まではかなり距離だが、普段から野を駆けているいちごにとっては楽しい道のりだ。

「いちごのおうちも、ケーキ屋さんなんだよ！」

歩きながら、いちごがニコニコと話した。一方、男の子はしょんぼりと肩を落としている。

家族が恋しくなったのか、それとも逆に帰りたくないのか。それは、わからない。ただ、男の子は黙りこくったまま、疲れ切った足を進めるだけだった。

カー、カーと鳥が一羽、飛び去っていく。空の雲は夕べの光を受けて、淡く色付いていた。

行く手に、田舎町のまばらな家並みが見えてきた。一番手前にあるのは、赤い屋根を持った煉瓦造りの家だ。まるでおとぎ話から飛び出してきたような、メルヘンチックな雰囲気である。煙突から

は柔らかな煙を吐き、穏やかに立っていた。

「あれが、いちごのお家なのー！」

いちごが、ピョンピョンとはしゃいで指差した。

「ほら、早くー！」

男の子の手をぎゅっと握むと、いちごは野うさぎのように駆け出す。

「ま、待ってよお……！」

男の子は、引きずられるようにしてついていく。

迫ってきた夕闇は、そんな二人を暖かく包み込んでいた。

*

「ただいまー！！！」

いちごの元気良い声を聞き付けたとき、めぐみは丁度キッチンで野菜を洗っているところだった。

めぐみは、日が昇る前に起きだし、いちごの世話をし、店で仕事をし、こつして夕食も作る。一日中、働き詰めだ。しかし、自分の好きな仕事をしていると思えば、それは全く苦ではなかった。

彼女は手早く手を拭くと、愛娘を迎えに急ぎ足で勝手口へと向かった。

「おかえりなさい。今日は遅かったわね」

めぐみは、勝手口でニコニコと立っていたいちごをぎゅっと抱き締める。それは、昼間遊んであげられないことへの、せめてもの穴埋めだった。

幸せに満ちた気持ちで、娘を抱くめぐみ。しかし、いちごはそっと母親の腕から離れた。

「あのね、今日はお友だちと一緒になの」

いちごが、ハキハキと言った。

「野原で会ったんだ！」

「まあ」

めぐみは、少し驚いて娘を見つめる。

「野原で？」

「うん！」

いちごは、満面の笑みで頷いた。

「あのね、パパが怖くて逃げてきたんだって！」

いちごの背後から、不安げな表情の男の子が現れた。顔も手足も汚れ、すっかり疲れ切っているようだ。

いちごが続ける。

「この子のパパ、すごいんだよ！あめりかとか、フランスでケーキ屋さんしてるんだって！」

それを聞いた瞬間、めぐみは身体中の血が凍ってしまったかのよう感じた。

それは…まさか。

めぐみは、男の子の顔を信じられない思いで見つめるしかなかった。

男の子の顔は、“彼”に良く似ていた。

あの有名パティシエ、倉木雄三に。

「久しぶりだな…めぐみ」

煙草をふかしながらソファにもたれる倉木雄三の声は、重く冷たく、室内に響いた。それを聞いためぐみは、ただ俯いて身を縮めているしかない。

ここは、町の警察署の応接室。いちごが連れ帰った男の子の正体を「行方不明になっていた倉木雄三の息子」と見破っためぐみは、男の子を伴って署に赴いたのだ。

そこで待っていた倉木は、黙つてめぐみに眼差しを向けるばかりだった。彼の妻が息子と共に応接室から出て行き、二人きりになつてしまつてから、ようやく口を開いたのだ。

「こうして顔を合わせるのは、5年ぶりか…」

倉木が言葉を発するのに合わせて、応接室に充満する煙の幕が色濃くなつていく。

「めぐみ…お前、私に恨みを抱いているだろう？」

倉木は、柔らかく言った。ガラステーブルの上に用意されていた灰皿に、ハラリと煙草の燃えかすが落ちる。

「お前の娘のことだな」

「もう、その話はやめてください」

めぐみが震えながら、しかしキツパリと言った。

「あれは、終わった話です。私は、雄三さんのことを恨んでなんかいません…」

「いいや。恨んでいるさ」

倉木は煙草の火を揉み消した。

「5年前、私は身重の妻がいるにも関わらず、お前と関係を持った。その結果、お前も身籠った…」

めぐみは身じろぎもせず、倉木を見つめた。

「だが、綾人が生まれた。私は家庭に戻った…お前を棄てて、な。お前が私を恨まない訳がない」

「…恨んでなどいません」

めぐみは、血の気のない唇で、懸命に繰り返した。

「あの時、あなたとの間に宿った命　いちごは、私の宝ですから」

「…」

「いちごが綾人君を連れて帰って来た時…私、本当に驚きました。血の繋がった兄妹が、何も知らずに手を繋いでいたんですもの」

めぐみの声は擦れていたが、凜とした響きを持っていた。

「あの子達は、もう二度と会うことも無いでしょう…でも、ほんの1日でも、共に過ごすことができた。それは奇跡ではないでしょうか」

「…確かに」

倉木が呟いた。

「奇跡、か…」

「私達も…もう、会うことは無いでしょうね」

めぐみが言った。

「あなたは、世界に通用するパティシエ。私は、田舎町のケーキ職人…今日、私達がこうして会えたことも、奇跡です…」

「…」

倉木は、無言のまま新しい煙草に火をつけた。

「そうだな」

再び、白い煙が応接室に満ちる。

めぐみは深く一礼し、部屋を出ていった。

めぐみの言葉通り、

この後二人が会うことは二度となかった。

「ママー」

今夜も可愛らしい声を上げ、いちごが閉店後の店先にやってきた。

「ママー、えほん読んでー!!」

「もうちょっと待っててね」

キャンドルの灯だけが店内を照らす中、店のシャッターを内側から閉めながら、めぐみは娘に微笑みかけた。

「うんっ、待ってる！今日もケーキ屋さんのお話してね！」

いちごはニコツとして、パタパタと店の奥へと走ってゆく。

めぐみは、薄暗い店内に一人立ち、遠ざかる娘の足音を聞いた。

彼女の表情は、穏やかだった。

「いちご…あなたは、私のいちばんの宝物よ」

例え、父親から望まれなかった子であったとしても。

私が、父親の分まで、あなたを愛してるから。

キャンドルの光は、温かくめぐみを包み込んでいた。

*

ちょうど同じ頃。

倉木雄三の息子 綾人は、一人ホテルのベッドに潜り込んでいた。

ホテルに帰って来た後、家出をしたことで両親にさんざん怒られた。しかし、身体についた草木の汁や泥を洗い流し、お腹いっぱい夕食を食べると、綾人は幸せな気持ちでいっぱいになった。彼は疲れ切って、すぐに眠ってしまったのだ。

眠りながら、綾人は微かにあどけない口元をあげた。

彼が見ていたのは、野原でいちごにもらったケーキの夢だった。

何の飾りもない、ただの茶色いケーキの夢。

けれど、その味は、今まで綾人が食べたどんなケーキよりも優しかった。

「ぼく…ケーキ、好き…」

小さく呟いたその寝言は、温かな闇の中へと溶けていった。

第2章

「1995年」1

1995年、春。

いちごと綾人が出会い、そして別れたあの日から、早くも6年が経った。

バブルが弾け、世の中は一気に不況のどん底へと沈没し、昭和だった元号は平成に変わった。

小さかったいちごの背丈も、この6年でぐうんと伸びた。とはいえ、同じ10歳の子供達と比べれば、ずっと小さい。

彼女の柔らかなチョコレート色の髪は背中の上まで伸び、抜けるように白い肌をいつそう輝かせていた。大きな瞳は幼い頃と変わらず、いつも夢をみているかのような光をたたえている。いちごが少し八重歯を見せて笑うと、周囲に春風が吹き抜けるかのようにだった。

いちごは、相変わらず一人で野原で駆け回って、毎日過ごしていた。もちろん、友達がいないわけではない。しかし彼女は、学校から帰ってきた後は、こうして一人で過ごすほうが好きだった。

花が、草が、鳥が、太陽が、いちごの一番の友達だから。

その日の夕方も、いちごは野原で遊び疲れて、帰宅の途についたところだった。

衝撃的な現実が、自分を待ち受けているとも知らずに…。

*

夕日の差し込む店内で、めぐみはいつものように働いていた。

ケーキを並べたショーウィンドウの前に立ち、接客をするのだ。

今日は午前中から来店者が多く、彼女はずっと休む間もなく働き続けていた。

注文をとる。

ケーキを丁寧に白い箱に詰め、赤いリボンをくるりと結ぶ。

会計をする。

客を、笑顔で見送る。

…この繰り返しだ。

しかし、どんなに仕事が多くても、めぐみは幸せだった。ケーキを売る仕事は、人に幸せを贈ることだから。

西日が窓から入ってくる時間になって、ようやく客足が収まってきた。先ほどまで混雑していた店内には、もうめぐみしかない。

「ふう…」

めぐみは満ち足りた表情で、小さくため息をつく。そして、シヨーウィンドウの脇に置いてある時計に目をやった。

そろそろ、いちごが帰ってくる頃かしら。晩ご飯の支度も、始めなくちゃね。

めぐみが、そう思ったときだった…。

ドクン！

急に、彼女の心臓が大きな音を立てた。

「！」

めぐみは、大きく目を見開く。

声が出ない。

息が苦しい。

そして彼女に襲い掛かったのは、胸から込み上げてくる強烈な痛みだった。

「あ……！」

めぐみは、思わずショーウィンドウに手をついた。そのまま、ズルズルと床に崩れ落ちる。

「……あ、あぁっ……」

痛い。

痛い。

痛い。

息ができない…。

めぐみの全身から、力がどんどん抜けていく。

「あ…あ…」

いぢい…

娘の顔を思い浮べた瞬間、めぐみの頭は真っ白になった。

「めぐみが倒れた…？」

ロサンゼルスケーキ店の一角で、倉木雄三はその知らせを受け取った。開店前の、一番忙しい時刻だ。しかし、倉木は弟子に業務を任せ、ひっそりと店の裏庭で電話に応じた。

日当たりの良い小さな花壇に、スマレが咲き乱れている。

「…どういうことですか」

厳しい表情で、倉木は問い掛けた。すると、電話口の向こうから、しわがれた声が返ってきた。

『私が物音に気付いて店先に出てきた時には、既にめぐみの意識はなかった…すぐに病院に運んだが、どうなるかはわからない』

疲れ切った様子で倉木と通話しているのは、めぐみの父であり、いちこの祖父であるケーキ職人 春野恵一だった。

老いて白髪になってしまった恵一だが、ケーキと一人娘のめぐみに対する愛情は、並大抵のものではなかった。

恵一は、その愛情故に倉木に殴りかかったこともある。それは、めぐみが倉木との間に命を宿した時だった。「娘を妊娠させておきながら、お前は逃げるといふのか！」と、物凄い剣幕で怒鳴りつけたのだ。その時は、めぐみが泣きながら恵一を止めた。

そんな恵一が自分に連絡をしてきたことに、倉木は戸惑いを隠せない。

「…なぜ、私に連絡を？」

ためらいながらも、そう聞いた。

すると、電話の向こう　遙か遠い日本の田舎町で、恵一はゆつくりと答えた。

『めぐみは…もう、ダメかもしれん。最後に…ほんの一瞬でもいい…会ってやってくれないか…？』

「…」

倉木の眼が、小さく揺れた。

擦れた声で、恵一は続ける。

『お前は、めぐみが愛したただ一人の男だ。私は、確かにお前のことを憎んでいる。だが、…めぐみのために…会ってやってほしい…』

「私は…」

倉木が答えかけた時だった。

「パパ！」

元気のいい声がして、店の裏庭に10歳くらいの少年が飛び出してきた。

整った顔立ち、ほっそりした身体つき。眼光の鋭い輝きが、倉木によく似ている。少し長めの髪が、サラサラと風に揺れた。

「綾人！電話中だ」

倉木は眉根を寄せ、口の形だけでそう告げる。

すると、途端に綾人は「しまった」という表情になった。しかし、その場から立ち去ろうとはしない。

「……」

倉木は小さくため息をついた。息子の前で、昔の愛人の話をする訳にはいかないからだ。倉木は、妻にも綾人にも、めぐみや彼女の娘の存在を告げてはいなかった。

そんなことを言ってしまうえば……確実に、倉木家は壊れてしまう。

「申し訳ありませんが」

倉木は静かに電話の向こうに呟いた。

「私は、行けません」

「……」

恵一は、言葉を失った。世界的パティシエとして働く倉木が、めぐみのために駆け付けられる筈はないと覚悟はしていた。しかし、こんなに簡単に断られてしまうとは。

「本当に……すみません」

倉木は再び呟き、目の前に立つ綾人を見つめた。

そう。この子のために……自分は、隠さなければならぬのだ。めぐみのことは、全て。

「……そうか……」

深いため息と共に、恵一が言った。

「……こんな話をして……すまなかった……」

そこで、電話は切れた。

倉木は、ツーツーツと鳴るばかりになった電話機を、しばらく耳から離せなかった。

病院の廊下は、静かだった。窓の外に広がる夜の闇とは対照的に、蛍光灯が明るく隅々まで照らしている。

いちごが祖母・登美に連れられて病院に駆け付けたとき、ちょうど恵一が医師と話を終えたところだった。

「あなた…めぐみは…」

登美が蒼白な顔で恵一に尋ねる。

めぐみによく似た大きな瞳、白い肌。しかし、登美がいつも持っている優しいな雰囲気は、今は消え去ってしまっている。愛娘の危篤の知らせに、すっかり動揺しているのだ。

「登美…」

恵一が力なく妻の肩を抱いた。

「めぐみは、今…目を覚ましたよ…」

ハッと息を呑み、登美が恵一を見つめる。が、恵一の暗い表情に気付いて、すぐに不安げに唇を震わせた。

「めぐみは、もうダメらしい」

恵一が低い声で言った。

「心臓に異常が見つかったそうだ…医者が言うには、恐らく今晚は持つまいと…」

「…そんな」

登美の身体から力が抜け、へなへたと恵一にもたれかかる。
「そんな…めぐみ…」

いちごは、黙って祖父母の会話を聞いていた。母親が死ぬかも
しれないという衝撃的な言葉を、噛み締めていた。

父親も兄弟もいないいちごにとって、めぐみは唯一の光だった。
いつも、めぐみの温もりを感じて育ってきた。

めぐみが愛してくれたから、淋しがらずにすんだ。

めぐみがいたからこそ、いちごは笑っていられた。

しかし。

残酷にも、運命はいちごからめぐみを奪おうとしているのだ。
最愛の人を。生きていく支えの人を。

「ママに会いたい…」
いちごが呟いた。

静けさばかりが漂う中で、登美と恵一がギョツと孫を抱き締め
た。

*

いちご達は、緊急治療室の中に入れられた。金属の機械ばかりが並ぶ、無機質な部屋だ。

その部屋の中央に、めぐみが横たわるストレッチャーがあった。

「ママ…」

いちごは声を上げ、固く握り締めていた登美の手を振りほどくようにしてストレッチャーに駆け寄った。

「ママ…！」

めぐみは、恐ろしい程に真っ白な肌をして、周囲の機械と同じように無機質に眠っていた。人工呼吸器が微かに曇らなければ、生きていくことすら判別し難い。

が、娘が近寄ってきた気配を感じ取ったのか、めぐみの目蓋が小さく震えた。

「ママ、いちごだよ。わかる？」

いちごは、幼い両手で、母親のふっくらした右手を包み込む。

お願い。

お願いだから、こっちを見て。

何か喋って。ママ。

「…いちご…」

弱々しい微かな声が、いちごを呼んだ。

「い…ちご…」

自分を呼ぶ微かな声に、いちごは思わず身を強ばらせた。

めぐみの目蓋が、ほんの少しだけ開いている。優しい光をたたえた瞳が、いちごを見つめている。

いちごは、その眼をじっと見つめ返した。何を言えばいいのか、わからない。ただ、貪るように最愛の母の眼を見ることしか出来なかった。

その傍で医師が動き、めぐみから人工呼吸器を外す。すると、めぐみが僅かに口元に浮かべた笑みが、いちごの瞳に映った。

「…いちごの、手は… 柔らかいね…」

めぐみが途切れ途切れに言葉を発する。

「あつたかくて…やさしくて…」

「ママ…！」

いちごは、泣きそうになりながら母親の手を握った。

「この手で…みんなを、しあわせにする、ケーキを…作るのよ…」

めぐみの指先が、娘の手に重なる。

いちごは激しく首を縦に振った。

「うん…私、頑張るから。頑張つて、みんなを幸せにするケーキを作るから…だから…」

行かないで、ママ。

まだ、私の隣にいて。

ケーキのこと、色々教えてよ。

いきなりお別れしちゃうなんて、嫌だよ。

「い、ち、ご…」

めぐみの声が、小さくなっていく。同時に、彼女の肩がピクンとした。

「ママ…？」

いちごは、気付かないうちに流れだした涙を拭うこともせず、めぐみを見つめる。

めぐみの息が、突然荒くなり始めていた。はぁ、はぁと必死に呼吸をしている。娘に預けた右手が、震えていた。

「ママ！」

いちごは、懸命に呼び掛けた。

「ママ！ママ！」

「い、ち、ご…」

苦しげな表情を見せながら、それでもめぐみは微笑もうとする。

「元気に、育つ、のよ……おじいちゃんとおばあちゃんの、言うことを、よく、きいて…」

「わかってる！わかってるからあ！」

いちごはポロポロと涙をこぼしながら叫んでいた。

「ずっと傍にいて！ママ！」

息が上がり、めぐみは激しく喘ぎだした。身を擦るかのようにはあはあと呼吸を繰り返す。

その痛々しい姿に、いちごは涙が止まらない。けれど、母親の手をしっかりと握り締めたまま、声をかけ続けた。

「ママ！ママ！」

「めぐみ、しっかり！」

「めぐみ！」

いちごの肩を後ろから支えていた登美と恵一も、めぐみを呼ぶ。

荒い息の下から、めぐみは愛する家族を見つめた。

めぐみにとって、世界で一番、大切な人達の顔を。

彼女は、目の前が真っ白に染まっていくのを感じながらも、最期の瞬間まで家族を見つめていた。

激しかったためぐみの息が、急に静かになった。

「ママ…」

いちごは、次から次へと溢れだす涙で顔をぐちゃぐちゃにしていた。それでも、母親の手は決して離さない。

めぐみは、白い肌を蛍光灯の光に輝かせながら、穏やかに横たわっていた。目蓋は優しく閉じられ、先ほどまでの苦痛の表情も消え失せている。

「ママ」

いちごは、もう母親が答えないとわかっていながら、呼び掛けずにはいられなかった。

「ママ…」

「午後8時45分です」

医師が告げた。

背後で、登美が泣き崩れた。恵一は無言で立ち尽くしている。

いちごは、両手でめぐみの右手を優しく包んだ。

「ママ…」

きつと、今は。

どんなケーキを食べても、幸せになんかなれない。

いちごは、そう確信していた。

第3章

「童話の国から来た彼女」 1

2006年、東京。

1月の風は、身を切るように冷たい。吐息は空中で白く変わり、霞のように消えていく。

とある私鉄の駅前でも、穏やかな陽光と共に、冬の風が吹き抜けていた。

その駅前には、まるで小さな美術館のようなケーキ店が建っている。白い外壁、回転式のドア、吹き抜けのフロア。窓から見えるのは、白を基調とした、モノトーンの店内だ。

今、そのケーキ店から、二人の男女が現れたところだった。男は、長身で暗い茶髪だ。女の子のような顔つきだが、Gジャンをサラッと着こなしている。寝起きなのか、少し顔色が悪い。

それに対して、女の頬には赤みが差していた。彼女は150センチほどの華奢な体付きだ。パッチワークの可愛いワンピースが、彼女の白い肌を引き立てている。

二人はつい先ほど、開店前の店内で出会ったばかりだった。

「君は…上京してきたばかりなんだよね？」

男 青山悟が、女性にドギマギしながら話し掛けた。

「あ、はい。東京に来たのは初めてなので、そのう…まだ、何もわからななんです」

女 春野いちごが、恥ずかしそうに答える。チョコレート色の髪が、サラサラと風に揺れた。

その笑顔を見ただけで、悟は身体の内側に春の日差しが宿った気がした。

「家もまだ見つけてない、って言ったよね？」

悟は確かめるようにいちごの顔を覗き込む。

「今は、野宿してるんです」

いちごはニコツと笑って答えた。

「え」

悟は思わず足を止める。

「今、なんて…」

「野宿です」

いちごは、堂々と繰り返した。

「最初はホテルに泊まるうかと思っただんですけど…東京のホテルは、お値段が高くて。それに、野宿って楽しいですよ」

「は!?!」

悟は唾然としていちごを見つめる。

この子、本気か?まさか、こんな可愛い子が野宿なんてする訳ないだろ...!?

「私、野宿好きなんですよね」

いちごはニコニコと話した。

「大きな木に寄りかかって寝るんですけど、木が子守唄を歌ってくれるんです。お星様も話しかけてくれるし...」

「ちよ、ちよっと待った」

悟は混乱する頭をどうにかおちつけようと、必死になっていちごを止めた。

「どういうことだ?木が歌う、って。星が話す、って。君の出身地の方言か?」

「私の育った地方では、方言は殆どありませんよ」

いちごは、大きな瞳で瞬きした。

「本当に、木やお星様が歌ってくれるんですよ。悟さん、木とお喋りしたこと無いんですか?」

「な、ないよ!」

悟は慌てて否定する。

「そうですか...」

いちごは、残念そうに表情を曇らせた。

「なかなか誰もわかってくれないんですよね...」

「あ...そうなの...」

悟は、なんとか苦笑いした。

どうやら、この子は相当な天然だな。まるで、おとぎ話から飛び出してきたみたいだ。

しかし、悟はいちごを微笑ましく見つめていた。どこか危なっかしい、儂げな夢見る彼女を。

二人の間に、柔らかな風が吹いた。

第3章

「童話の国から来た彼女」2

夕暮れが近くなる頃。

二人は、寒風に身を縮めながら、古ぼけたアパートの外階段を上っていた。

築40年は軽いだろっ建物だ。屋根や外壁には蔦がびっしりと絡み付き、錆付いた外階段は、踏みしめられる度にキイキイと軋む。そのせいか、家賃は格段に安い。

ケーキ店からはかなり離れた住宅街に建つアパートだが、自転車や車を使えば通勤に問題はない。

ここが、悟が一人暮らししている場所だった。

「とりあえず…入って」

二階の一番奥の部屋の前に辿り着くと、悟は風に乱れた髪をぐしゃっと後ろに撫でた。

「こんな寒い日に、君を野宿させる訳にはいかないよ。今日は家を決められなかったけど、明日また探そう」

「はい…ありがとうございます」

いちごは、冷気に頬を赤くしながら頭を下げた。

「一日中付き合わせちゃった挙句に、泊めて頂くことになって…本当にすみません」

「あー、全然気にしなくていいから」

悟は照れくさくなって、ぶっきらぼうに答える。そして、いちこのためにドアを開けた。そして、中に入るよう促す。

「俺こそゴメンな。いい部屋、見つけてやれなかった」

そう。

朝から近辺の不動産を渡り歩いたものの、いちこの家を決めることは出来なかったのだ。

紹介されたのは、家賃が高すぎる新築や、古さ故に隙間風が入ってきたりする物件ばかりだった。パティシエを目指しているいちこにとっては、キッチンがついていない物件も対象外となる。

悟は大学をサボってまでいちごに付き合ったのだが、結局何も収穫が無いまま夕方を迎えてしまった。

それでも、悟は不思議と爽やかな気分だった。

いちごと一緒にいると、なぜか心が落ち着いてくる。彼女が、ひと足早く春の香を届けてくれるかのようだ。

いちごと共に薄暗い部屋に入り、ドアを閉めると、悟はパチンと電気を点けた。

1DKの、畳の部屋だ。正面に破れた障子窓があり、そこから太陽が最後の光を投げ掛けている。窓の下に布団が敷いてあり、畳

には服や雑誌がバラバラと散らばっていた。右手の片隅には、背の低い円卓。小さいが、キッチンもある。

「やべっ」

悟は、慌てて片付けに走った。こんな汚い部屋に、女の子を寝かせることなどできないと思ったからだ。

だが、いちごは彼の手を止めようとする。

「あっ、あの…私のことは、そんなに気にしないでくださいっ。本当に…」

彼女の柔らかな手が、悟の手に重なった。

「！」

悟は、ビクッと身を震わせる。いちごに触れられた途端、自分の胸がドキッと激しく高鳴ったのだ。そして、一気に体温が上がった気がした。まるで、胸の奥で炎が燃え上がったかのようだ。

「…どうかしましたか？」

突然動きを止めた悟を訝しく思ったのか、いちごが彼の顔を覗き込もうとする。

悟は、顔を見られまいと必死でいちごに背を向けた。

今、見られてしまえば…紅潮した頬に気付かれてしまうから。激しく自分を揺さ振る、胸の鼓動に気付かれてしまうから。

「悟さんって、面白いですねー！」

悟の背後で、いちごがクスクスと笑っていた。

今、この瞬間。

彼の中に「ある感情」が目覚めたことなど、全く知らずに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1281j/>

* Love cake for you *

2010年10月8日23時14分発行